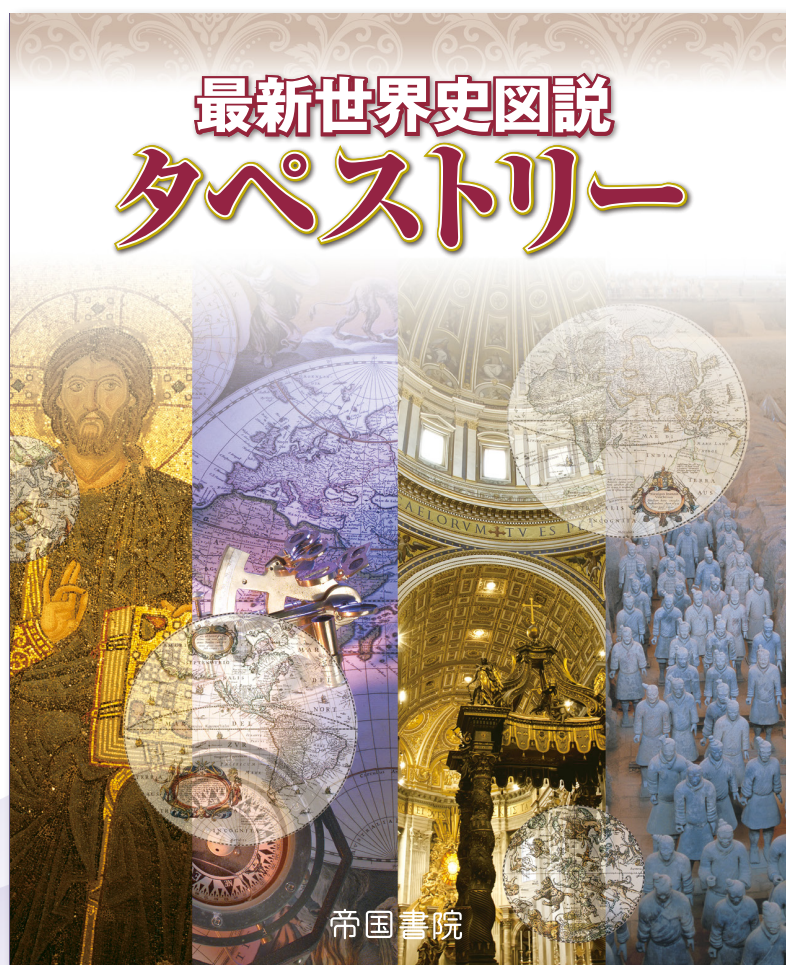


『タペストリー』で解く 大学入試論述問題



- | | |
|----------------------------|--------------------------|
| 1 東京大学/京都大学 入試問題 p.2 | 5 慶應義塾大学 入試問題 p.10 |
| 2 東京大学/京都大学 入試問題 p.4 | 6 慶應義塾大学 入試問題 p.11 |
| 3 京都大学 入試問題 p.6 | 7 早稲田大学 入試問題 p.12 |
| 4 慶應義塾大学/大阪大学 入試問題 ... p.8 | 8 北海道大学 入試問題 p.14 |

▼【2019年東京大学入試問題 第1問】改

1989年(平成元年)の冷戦終結宣言からおよそ30年が経過した。冷戦の終結は、それまでの東西対立による政治的・軍事的緊張の緩和をもたらし、世界はより平和で安全になるかに思われたが、実際にはこの間、地球上の各地で様々な政治的混乱や対立、紛争、内戦が生じた。とりわけ、かつてのオスマン帝国の支配領域はいくつかの大きな紛争を経験し今日に至るが、それらの歴史的起源は、多くの場合、オスマン帝国がヨーロッパ列強の影響を受けて動揺した時代にまでさかのぼることができる。

以上のことを踏まえ、18世紀半ばから1920年代までのオスマン帝国の解体過程について、帝国内の民族運動や帝国の維持を目指す動きに注目しつつ、記述しなさい。解答は、解答欄(イ)に22行以内で記し、必ず次の8つの語句を一度は用いて、その語句に下線を付しなさい。

アフガーニー セーヴル条約 ミドハト憲法 ギュルハネ勅令 日露戦争
ロンドン会議(1830) サウード家 フサイン=マクマホン協定



論述のポイント

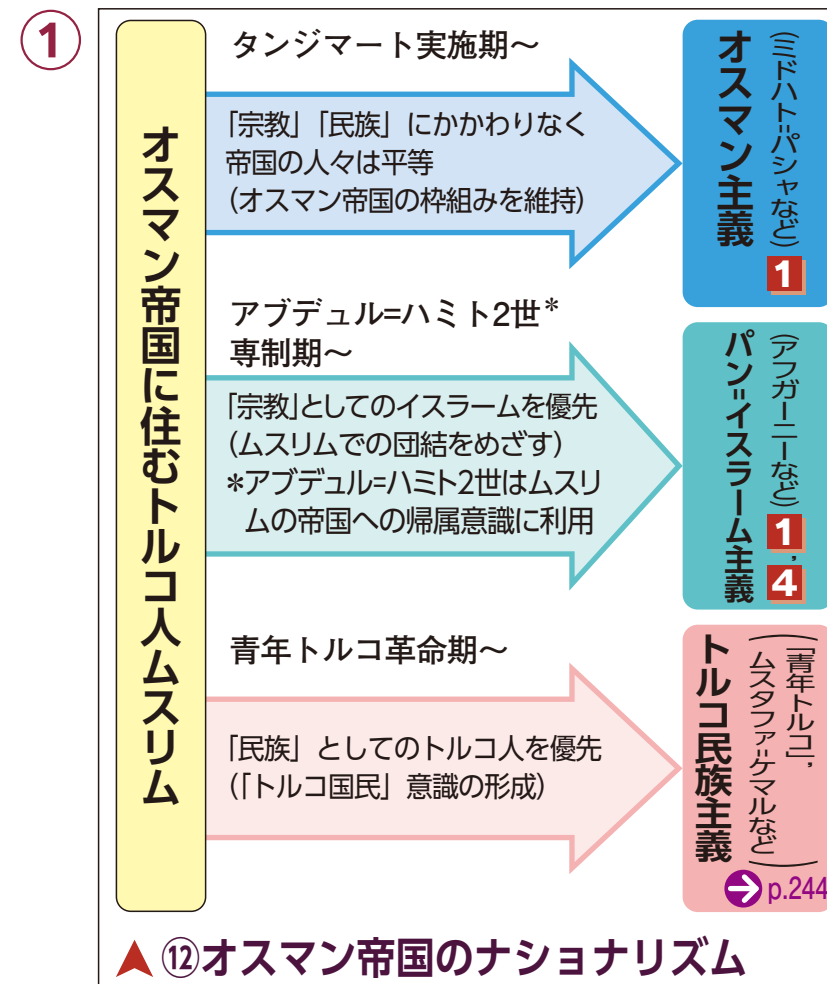
この問題で押さえるべきポイントとしては、タンジマート実施期は宗教や民族に関係なく帝国の人々は平等なオスマン人であること、アブデュル=ハミト2世専制期はムスリムの団結を目指したこと、青年トルコ革命期は民族としてのトルコ人の団結を優先したことを記述することが挙げられます。

『タペストリー』p.223⑩「オスマン帝国のナショナリズム」(①)では、タンジマート実施期、アブデュル=ハミト2世専制期、青年トルコ革命期と3つの期で、それぞれ「オスマン主義」「パン=イスラーム主義」「トルコ民族主義」とまとめられているため、理解しやすく、論述の枠組みを作ることができます。

また、この問題の指定語句のうち、「ロンドン会議(1830)」は非常に難解となっています。通常生徒はギリシア独立をアドリアノーブル条約で覚えていることが多いですが、『タペストリー』ではp.337の年表中(②)に1830年のロンドン会議で採択された「ロンドン議定書」(ギリシア承認)についての記載もあります。

類題 2018年京都大学入試問題 第1問 改

内外の圧力で崩壊の危機に瀕していた、近代のオスマン帝国や成立初期のトルコ共和国では、どのような人々を結集して統合を維持するかという問題が重要であった。歴代の指導者たちは、それぞれ異なる理念のもとづいて特定の人々を糾合することで、国家の解体を食い止めようとした。オスマン帝国の大宰相ミドハト=パシャ、皇帝アブデュルハミト2世、統一と進歩委員会(もしくは、統一と進歩団)、そしてトルコ共和国初代大統領ムスタファ=ケマルが、いかにして国家の統合を図ったかを、時系列に沿って300字以内で説明せよ。



▲『タペストリー二十四訂版』p.223 (十二訂版より現在の表現で掲載)

1830 ポーランド11月蜂起 (ワルシャワ革命、～31)	1830 仏、アルジェリア占領	1830 ファン=デ ン=ボス(蘭)総 督、ジャワに 政府栽培制度 実施	1830 回部の乱鎮定 アヘン禁止令を頒 発
1830 ロンドン議定書(英仏など、ギリシア承認)	1831 第1次エジプト=トルコ戦争(ムハン マド=アリー、シリアに侵入、～33)	1831 英東インド会社、マイソ ールを支配	○イギリス、三角貿易を行う
1832 ポーランド、自治権 失い露直轄地となる	1832 エジプト軍、オスマン軍をコンヤに 破りシリアを征服	1831 英東インド会社、マイソ ールを支配	1831 アヘン輸入、重ねて厳禁
○ブーシキン(1799～ 1837)『大尉の娘』	1833 ウンキシャル=スケレッシ条約(露土間) ○フランス人、サハ ラ砂漠探検	1833 英、東インド会社の商業活 動停止	1832 湖南・広州のヤオ族の反乱 福建・ 台湾の反乱(～33)
	1833 オスマン朝、 ムハンマド=アリ ＝(エジプト)のシ リア領有を認める	1833～35 初代インド総督ベンテ イंक	1833 英、東インド会社の対中国貿易独 占権廃止
	1835 ボーア人、ケ ープ植民地より奥 地に移動開始	1837～58 バハール=ドウル=シャー2 世(最後の皇帝)	1834 英使節ネーピア、広州到来 外国 船を駆逐し、アヘンの運搬販売を厳禁
	1839 第2次エジプト=トルコ戦争(～40)	1838 英、シク教徒と同盟を結ぶ 英、ニュー=ジラード会社を設 立	1836 アヘン吸煙罪を定める
1840 露、列強とともに エジプトを圧迫(ロン ドン四国条約)	1839～61 アブデュ ル=メジト1世(土)	1840～93 ハワイ王国	1839 林則徐を欽差大臣として広州派遣 林則徐、アヘン2万余箱没収、英船広 州入港禁止
1841 土地付農奴の売買 禁止、五国海峡協定 (英・仏・露・普・奥、 露の南下政策阻止)	1841 ムハンマド= アリー、シリア 放棄	1840 ニュー=ジラード、英領に	1840～42 アヘン戦争
		1842 仏、タヒチ領有 英、カー ブル占領	1841 和議破れ、英軍、厦門・寧波を占領、 平英団事件
		1843 英、シンド地方を征服併合	1842 魏源(1794～1857)『海国図志』 南京条約(5港の開港、香港島割譲、 公行の廃止)
	1844 ギリシア、立		1843 五港通商章程(領事裁判権) 虎門

▲『タペストリー二十四訂版』p.337 (発刊時より掲載)

▼【2011年東京大学入試問題 第1問】改

歴史上、異なる文化間の接触や交流は、ときに軋轢を伴うこともあったが、文化や生活様式の多様化や変容に大きく貢献してきた。たとえば、7世紀以降にアラブ・イスラーム文化圏が拡大するなかでも、新たな支配領域や周辺の他地域から異なる文化が受け入れられ、発展していった。そして、そこで育まれたものは、さらに他地域へ影響を及ぼしていった。

13世紀までにアラブ・イスラーム文化圏をめぐって生じたそれらの動きを、17行以内で論じなさい。その際に、次の8つの語句を必ず一度は用い、その語句に下線を付しなさい。[1行30字]

インド アッバース朝 イブン＝シーナー アリストテレス 医学 代数学 トレド シチリア島

論述のポイント

東京大学の入試問題は、問題文のすべてが重要なヒントになっています。この問題では、各地の文化が「受け入れられ」、「発展し」、「他地域へ」影響を及ぼしたとあります。よって、地域ごとに、「〇〇文化が流入した」、「△△文化が影響を与えた」という記述ではなく、具体的な文化の名称をあげ、それが「どのように」発展し、「どの地域へ」影響を及ぼしたかを記述するほうが、問題文に即しているといえます。

この問題で押さえるべき点としては、

- 全般：アッバース朝時代、知恵の館で諸文献をアラビア語に翻訳
- 医学・数学：ギリシア・インドから継承、アラビア数字・ゼロの概念・フワーリズミーによる発展、イブン＝シーナーの医学典範がヨーロッパの大学で使用される
- 製紙法・羅針盤：中国からイスラーム文化圏へ継承→ヨーロッパへ
- 哲学：ギリシアから継承、スンナ派神学の体系化→ヨーロッパ（トレドやシチリア島のパレルモ）に伝わり12世紀ルネサンス、アリストテレス哲学によりスコラ哲学が発展
- 天文学：オリエントから継承→中国で授時暦へ

ということが挙げられます。

『タペストリー』p.128③「イスラーム文化はどこから来たか」(①)では、そうした動きが、構造図で示されているため、p.128⑦「イスラーム文化」(②)の表組みと合わせて確認することで、論述の枠組みを作ることができます。また、アッバース朝の直前にササン朝があるため、世界的な帝国であったササン朝で各地の文化が一度受容され、それをアラブ・イスラーム文化圏が継承したという、大きな流れも把握することができます。

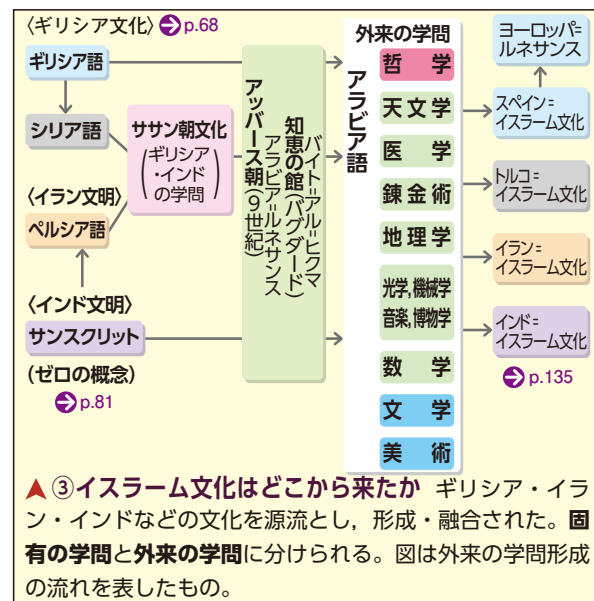
類題 2001年京都大学入試問題 第1問 改

9世紀以降、バグダードやコルドバを中心に急速に発達したイスラム文化は、その後も発展を重ね、世界の文化の進展に様々な影響を及ぼした。

このイスラム文化について、次の4点に注意しつつ、300字以内で述べよ。解答は所定の解答欄に記入せよ。句読点も字数に含めよ。

- 1 発達・発展の過程。どのような過程を経て発達・発展したか。
- 2 内容と特徴。どのような分野が優れ、どのような特徴を持っていたか。
- 3 担い手。どのような人々を中心に発達したか。
- 4 他文化への伝播・影響。何をどこに伝え、どのような影響を及ぼしたのか。

1



2

1 固有の学問	A 神学	『クルアーン(コーラン)』の注釈、ムハンマドの言行に関する伝承(ハディース)を基礎として、両者合体して発達	ガザリー(1058～1111, セルジューク朝)
	B 法学	ムハンマドの伝記研究から発達	ラシード=ウッディーン(1247ごろ～1318, イル=ハン国の宰相) 『集史』
2 外来の学問	C 歴史学	イブン=ハルドゥーン(1332～1406, マムルーク朝) 『世界史序説』	タバリー(839～923, アッバース朝) 『諸預言者と諸王の歴史』
	その他	文学・修辞学・詩学などクルアーンを正確に読むための研究	文法・修辭学・詩学などクルアーンを正確に読むための研究
3 その他	哲学	ギリシア哲学(アリストテレス注釈)中心(『知恵の館』でアラビア語に翻訳)	イブン=ルシュド(アヴェロエス、ムワッヒド朝)(1126～98) ガザリー
	A 数学	ギリシアのユークリッド幾何学・インドの代数学を吸収・発展	→アラビア数字・ゼロの記号を完成。代数学・三角法、12世紀以降ヨーロッパへ
4 その他	B 天文学	占星術から発達。ムスリム商人の活躍で航海術・暦学も発達	バグダード・ダマスカス・サマルカンドに天文台設置
	C 地理学	イドリシー(1100～65ごろ, シチリアで活躍)	イブン=バットウータ(1304～77, モロッコ出身) 『三大陸周遊記』
5 その他	D 医学	イブン=シーナー(アヴィケンナ)(980～1037, サーマーン朝)	『医学典範』ギリシア・アラビア医学の集大成
	E 化学	錬金術から発達 昇華作用の発見 蒸留・ろ過の方法を発明	その他 論理学・音楽・機械学・光学・博物学など
6 その他	文学	『千夜一夜物語(アラビアン=ナイト)』	フィルドゥッシー(940ごろ～1025, ガズナ朝) 『シャー=ナーメ』宮廷文学・詩発達
	美術	モスク建築(ドームとミナレット) アラベスク 細密画(ミニアチュール)	オマル=ハイヤーム(1048～1131, セルジューク朝) 『ルバイヤート』
7 その他	研究機関	アズハル学院(カイロ, ファティマ朝) ニザーミーヤ学院(セルジューク朝)	

◆ヨーロッパに影響を与えた科学以外の文化

火薬・磁針(羅針盤)・紙・印刷術…以上は中国起源 p.160

築城法・石弓の使用・伝書鳩の利用・じゅうたんやカーテンの装飾・軍隊の打楽器・甲冑や紋章・戦勝祝賀のイルミネーション・砂糖・コーヒー飲用など

▲⑦イスラーム文化

128 イスラーム文化 ～ネットワークから生まれた融合文化

128 イスラーム文化 ～ネットワークから生まれた融合文化

アラビアン=ナイトの世界のネットワーク

① 固有の学問

② 外来の学問

③ イスラーム文化

④ 天文学

⑤ 数学

⑥ 医学

⑦ 化学

⑧ 物理学

⑨ 天文学

⑩ 天文学

⑪ 天文学

⑫ 天文学

⑬ 天文学

⑭ 天文学

⑮ 天文学

⑯ 天文学

⑰ 天文学

⑱ 天文学

⑲ 天文学

⑳ 天文学

㉑ 天文学

㉒ 天文学

㉓ 天文学

㉔ 天文学

㉕ 天文学

㉖ 天文学

㉗ 天文学

㉘ 天文学

㉙ 天文学

㉚ 天文学

㉛ 天文学

㉜ 天文学

㉝ 天文学

㉞ 天文学

㉟ 天文学

㊱ 天文学

㊲ 天文学

㊳ 天文学

㊴ 天文学

㊵ 天文学

㊶ 天文学

㊷ 天文学

㊸ 天文学

㊹ 天文学

㊺ 天文学

㊻ 天文学

㊼ 天文学

㊽ 天文学

㊾ 天文学

㊿ 天文学

129 外来の学問

129 外来の学問

① 天文学

② 天文学

③ 天文学

④ 天文学

⑤ 天文学

⑥ 天文学

⑦ 天文学

⑧ 天文学

⑨ 天文学

⑩ 天文学

⑪ 天文学

⑫ 天文学

⑬ 天文学

⑭ 天文学

⑮ 天文学

⑯ 天文学

⑰ 天文学

⑱ 天文学

⑲ 天文学

⑳ 天文学

㉑ 天文学

㉒ 天文学

㉓ 天文学

㉔ 天文学

㉕ 天文学

㉖ 天文学

㉗ 天文学

㉘ 天文学

㉙ 天文学

㉚ 天文学

㉛ 天文学

㉜ 天文学

㉝ 天文学

㉞ 天文学

㉟ 天文学

㊱ 天文学

㊲ 天文学

㊳ 天文学

㊴ 天文学

㊵ 天文学

㊶ 天文学

㊷ 天文学

㊸ 天文学

㊹ 天文学

㊺ 天文学

㊻ 天文学

㊼ 天文学

㊽ 天文学

㊾ 天文学

㊿ 天文学

▲『タペストリー二十四訂版』p.128-129 (発行時より現在の表現で掲載)

▼【2007年京都大学入試問題 第3問】改

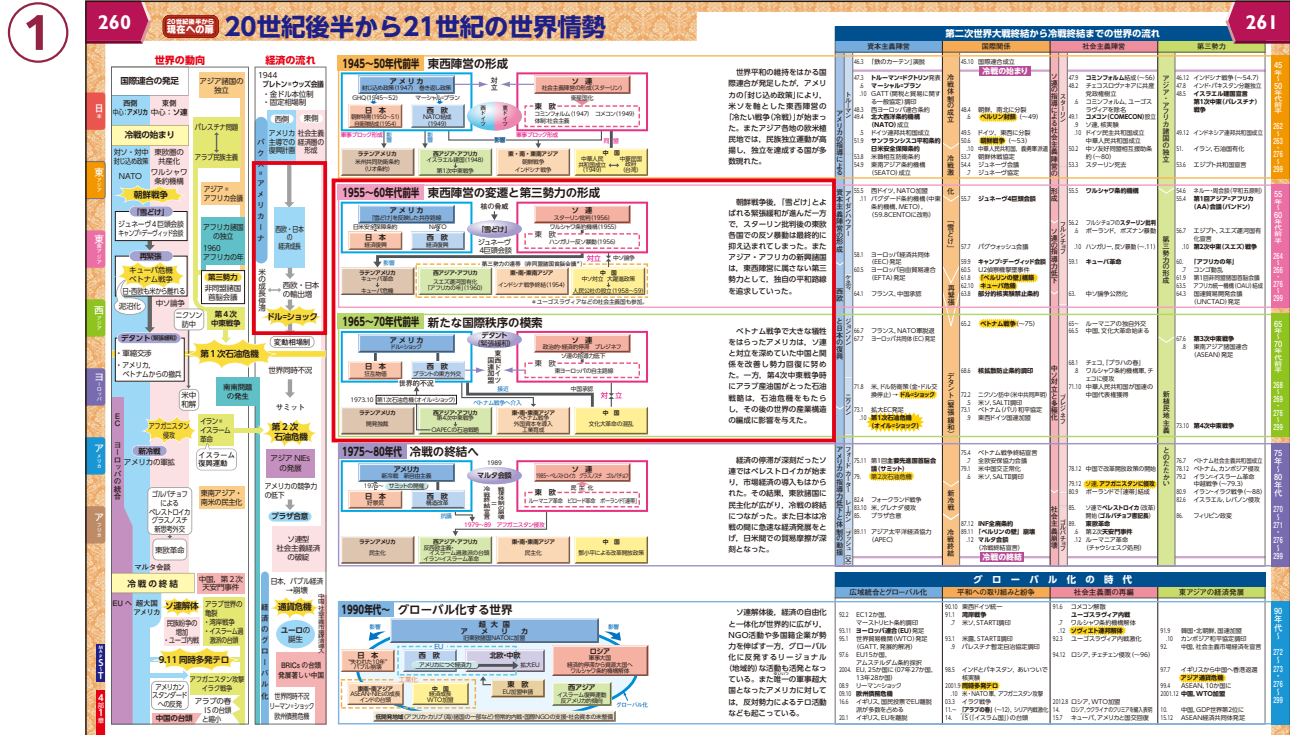
第二次世界大戦後の世界は、アメリカ合衆国とソヴィエト社会主義共和国連邦（ソ連）がそれぞれ資本主義圏と社会主義圏の盟主として激しく対立する、いわゆる二極時代で幕が開いた。だが1950年代半ばになると二極構造に変化がきざし、1960年代以降、その変化は本格的なものになった。1960年代に世界各地で起きた多極化の諸相を、300字以内で具体的に説明せよ。

論述のポイント

この問題では、1960年代に起きた国際社会の多極化を具体的に説明することが求められています。この問題で押さえるべきポイントとしては、

- 背景である50年代半ば：第三勢力の台頭→アジア・アフリカ会議や非同盟諸国首脳会議。問題文の題意から直接には外れるが、「二極構造に変化」という問題文から、第三勢力に言及。
 - 60年代前半：東西両陣営の動揺（日欧の台頭・反ソ暴動）
 - 60年代後半：多極化から新たな国際秩序へ（中ソ対立・文化大革命→米中接近、E C発足）
- ということが挙げられます。

『タペストリー』では、1945年以降の世界の動きを、国際政治、国際経済、日本の位置づけの3つの視点で、約10年ごとに見開きで扱っています。そのため、『タペストリー』p.260-261の年表や構造図、説明文(①)、p.266「第三勢力の形成」(②)、p.268「新たな国際秩序の模索」(③)を確認することで、この論述の枠組みを作ることができます。



▲『タペストリー二十四訂版』 p.260-261（十一訂版より現在の表現で掲載）



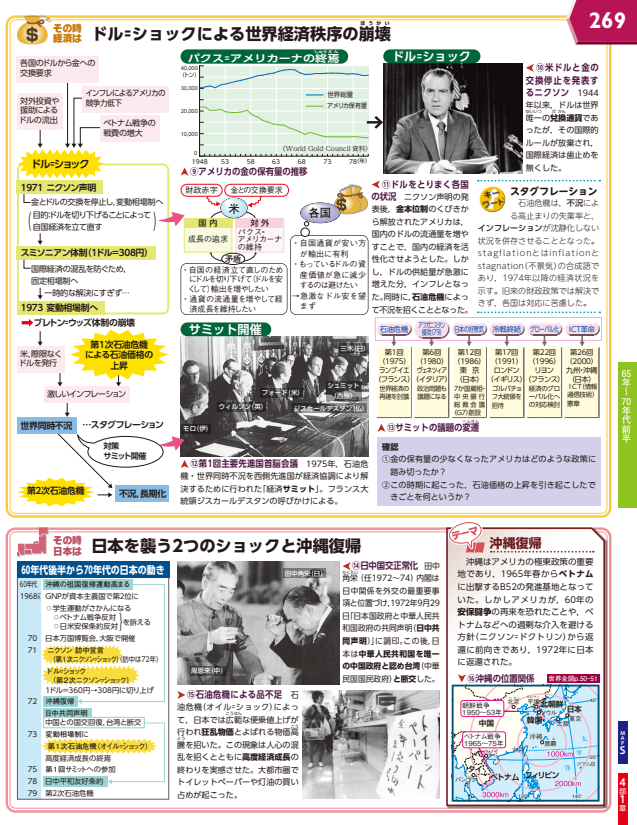
▲『タペストリー二十四訂版』 p.266-267（十一訂版より現在の表現で掲載）



▲『タペストリー二十四訂版』 p.268-269（十一訂版より現在の表現で掲載）



表現で掲載)



表現で掲載)

▼【2020年慶應義塾大学経済学部入試問題 第1問 問3】改

……ポルトガルやスペインはアジア域内の貿易に参入し、Cポルトガル商人は日明貿易の主要な担い手にもなった。日本の大名や商人もアジア諸地域との貿易を行い、こうした活発な貿易は17世紀前半まで続いた。

下線部Cに関連して、ポルトガル商人が日本と明との間の貿易を中継するようになった背景について、取引された主な商品と、明の貿易政策に触れながら、解答欄Bの所定の欄の範囲内（100字程度）で説明しなさい。



論述のポイント

この問題では、16世紀頃の東アジア海域の貿易について、論述することが求められています。ここで押えるべきポイントとしては、

- ・明は海禁政策で朝貢貿易を基本に、東南アジア諸国とは交易
- ・海禁緩和後も日本との貿易は禁止

・ポルトガルはマカオと平戸に拠点をもち、日本産の銀と中国産の生糸を交換する中継貿易で利益を得ていたということが挙げられます。

『タペストリー』p.37「日本と東アジア海域」(①)では、東アジア海域を一望できる図があり、各地の物産が明示されています。また、地図上の説明文に番号がついているため、流れが理解できます。p.117①の構造図(②)では、明の海禁政策及びその緩和が図で示されていて、日明貿易の特徴や背景が説明できるようにしています。

このテーマは、入試で頻出する傾向にあります。上記のページを参考にすることで、論述の大枠をとることができるでしょう。

類題 2007年大阪大学入試問題 第3問 問4 改

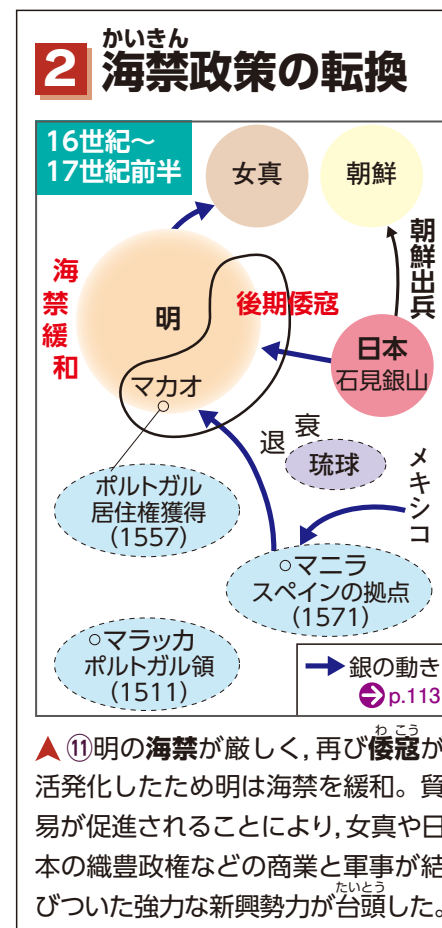
朱印船のおもな渡航先は東南アジア各地と台湾で、とくにベトナム、シャム（タイ）、ルソン（フィリピン）などが上位を占めた。なぜ伝統的に最大の貿易相手だった中国大陆ではなく東南アジア・台湾に渡航したのか、またベトナム、シャム、ルソン三地域は当時どのような情勢だったかの二つの問題を説明しなさい（180字程度）。

①

▼『タペストリー二十四訂版』p.37（発刊時より掲載）



②



▼『タペストリー二十四訂版』p.117（十六訂版より掲載）



▼【2019年慶應義塾大学経済学部入試問題 第3問 問17】改

ベルリンの壁が建造された1960年代に起こった「プラハの春」とそれに対するソ連の対応について、制限主権論という概念を用いて、解答欄Bの所定の欄の範囲内（120字程度）で説明しなさい。

 論述のポイント

この問題では、「プラハの春」について、「制限主権論」という概念を用いて説明することが求められています。この問題で押さえるべきポイントとしては、

- ・チェコスロヴァキアのドプチェク（共産党第一書記）が民主化運動/自由化路線を開始
- ・（ソ連の）ブレジネフ書記長が、社会主義諸国の全体利益は各国の利益より優先されるという制限主権論で、ワルシャワ条約機構軍を動員して、運動を弾圧/内政干渉を正当化 *（ ）は省略可 / は別解ということが挙げられます。

『タペストリー』p.268⑤「「プラハの春」の弾圧」(①)では、「制限主権論」という概念を用いて、解説文が記されているため、「プラハの春」と「制限主権論」を関連付けて理解し、この論述の大枠をとらえることができます。

①



▲⑤「**プラハの春**」の弾圧 1968年、**チェコスロヴァキア**共産党第一書記**ドプチェク**は事前検閲の廃止や市場原理の導入など、自由化路線を進めた。しかし、ソ連中心のワルシャワ条約機構軍の侵攻により（チェコ事件）、ドプチェクらは逮捕され、短い「春」は終わった。**チェコスロヴァキア**への内政干渉は、当時ソ連の書記長であった**ブレジネフ**がとなえた「**社会主義諸国の全体利益は各国の個別利益よりも優先される**」という**ブレジネフ=ドクトリン**（制限主権論）によって正当化された。

▲『タペストリー二十四訂版』p.268（十一訂版より「制限主権論」についても解説で言及）

▼【2019年慶應義塾大学経済学部入試問題 第1問 問6】改

……1848年2月に樹立された第二共和政がどのように終焉したか、解答欄Bの所定の欄の範囲内（60字程度）で説明しなさい。

 論述のポイント

この問題では、二月革命以後のフランス政体の変化について説明することが求められています。この問題で押さえるべきポイントとしては、

- ・ルイ＝ナポレオンが1848年の選挙で大統領に、その後、クーデタで独裁権を握り、国民投票で皇帝となるということが挙げられます。

『タペストリー』p.198の年表(②)では、第二共和制から第二帝政に移行するまでの主要事項と、時の国王および皇帝の変遷を確認することができます。とくに、ナポレオン3世が、クーデター、国民投票を経て皇帝の地位を得ることがわかるため、論述のポイントを押さえることができます。

②

p.190,192 フランス政体の変化 p.284		日本
政体	主要事項	
ブルボン朝(絶対王政)	1789 フランス革命 ②p.188	
第一共和政	93 ルイ16世処刑 皇帝:ナポレオン1世 位1804～14,15	
第一帝政	1814 ウィーン会議(～15) ②p.192 国王:ルイ18世 位1814～24 国王:シャルル10世 位1824～30	
ブルボン復古王政	1830 アルジェリア出兵 1830 七月革命 ②p.192 国王:ルイ・フィリップ 位1830～48	
七月王政	1848 二月革命 ②p.192 臨時政府、国立作業場創設 四月普通選挙・六月暴動(蜂起)	
第二共和政	大統領:ルイ・ナポレオン 1851 クーデタ 52 国民投票 帝政宣言 皇帝:ナポレオン3世 位1852～70	
第二帝政	1853 ハリ大改選(～70) クリミア戦争(～56) ②p.205 パリ万国博覧会 55 アロー戦争(～60) ②p.229 58 インドシナ出兵(～67) ②p.226 59 イタリア統一戦争 ②p.200 61 メキシコ出兵(～67) 61 第三共和政(～71) ②p.201 70 普法戦争(～71) ②p.201 セダンで捕虜となり退位 ②p.201 対外進出の活性化	
第三共和政	1870 臨時国防政府成立 71 臨時政府(初代大統領:ティエール、～73) パリ・コミューン(3月～5月) アルザス・ロレーヌをプロイセンに割譲 75 第三共和政憲法制定 ②p.202 第三共和政確立	
第三共和政	81 チュニジア保護国化 87 プラタンジェ事件(～91) 仏領インドシナ連邦成立 89 パリ万国博覧会 91 露仏同盟成立(～94) 94 ドレフュス事件(～99) ②p.202 1901 急進社会党結成 14 第一次世界大戦(～18) 36 ブルム人民戦線内閣(～37) 39 第二次世界大戦(～45) 40 フランス降伏	
ヴィシー政府 臨時政府(共和政)	②p.254 国家主席:ペタン ②p.254 主席:ド・ゴール	
第四共和政	1946 第四共和政憲法制定 46 インドシナ戦争(～54) ②p.298 54 アルジェリア戦争(～62) ②p.288	
第五共和政	②p.288 初代大統領:ド・ゴール	

198 19世紀後半のフランス ～めまぐるしく変わる政体

最後に来たのは？皇帝ナポレオン3世！

ナポレオン3世

①フランス政体の変化

②ナポレオン3世の対外進出と政治

③史上初の民衆による自治政府

④パリ・コミューン

▲『タペストリー二十四訂版』p.198（三訂版より現在の表現で掲載）

『タペストリー』で解く

大学入試論述問題

監修 東京都立西高等学校 小豆畑 和之

TEL: 03-3262-4795 (代) 2025年10月発行

URL: <https://www.teikokushoin.co.jp/> ©帝国書院2025



帝国書院